

通級指導教室における自立活動の指導と連携モデル試案 ～「チャレンジ日記SSTプログラム」の実践と検証を通じて～

高島 佳江

I 研究の背景

1 発達障害児が抱える課題

発達障害児は、社会性のつまずきを抱え、孤立、自信喪失、意欲喪失等となり、さらなる社会的不適応となり、自己肯定感低下につながることが多い(小貫・名越・三和, 2004)。

2 発達障害児支援における課題

大人が信頼関係、連携をうながすシステムをつくることが大切である(星山, 2012)。通級教室は保護者や担任、様々な分野の専門家と連携、協働することが大切である(笹森・大城, 2014)。

3 通級指導教室における自立活動の指導

通級指導教室では、特別の教育課程を編成し『自立活動』の内容を取り入れる。自立活動の指導の内容は、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素で構成される。通級指導教室における指導の成果が通常の学級における指導につながり、児童の適応状態が改善すること、下がりがちな自己評価、学習意欲を高めることを基本に、通常の学級における個別的な支援、合理的配慮へつなげていくことを目的とした指導の工夫が重要である(笹森, 2017)。

4 チャレンジ日記・発表に関する先行研究

武蔵(2010)は、発達障害児が家庭や地域社会で豊かで自立的な生活を送るために、支援ツールによる支援システムを提案した。支援ツールの一つに、「チャレンジ日記」があり、その内容を発表する活動が、「チャレンジ発表」である(大村・武蔵, 2004)。本人と保護者、担任、また友達同士が褒め合うことで、本人の自発性や意欲を育てることを目的とする(高島・武蔵, 2013)。

チャレンジ日記とは、子どもが頑張ったことを、本人または家族・教師が記入し、褒め励ます交換記録日記である。

5 社会的適応力に関する先行研究

社会的適応力とは、社会生活や対人関係を営んでいくために必要とされる力、相手の気持ちを理解し、コミュニケーションをとる力である(上野・岡田, 2014)。

6 自己肯定感に関する先行研究

本研究における自己肯定感とは、自己に対して、前向きで、好ましく思い、自分のよさを肯定的に認める感情や態度とする(田中, 2011)。榎本(2010)は、人からほめられることで自己肯定感が身に付いてくる、社会的適応力も自己肯定感と関係すると述べている。

II 研究目的と研究方法

1 研究1 通級指導教室におけるチャレンジ日記SSTプログラムの実践と検証

(仮説1) チャレンジ日記・発表の取組とグループでのSSTを組み合わせた「チャレンジ日記SST」を実践すると発達障害児の社会的適応力と自己肯定感が向上するのではないかと検証する。

※チャレンジ日記SSTプログラムを「チャレンジ日記SST」とする。

1) 研究目的 通級指導教室において「チャレンジ日記SST」を実践し、発達障害児の社会的適応力と自己肯定感の向上ができるかどうかを検証する。

2) 研究方法 チャレンジ日記の累積記録や本人・保護者・担任アンケートの結果の分析、S-

M社会生活能力検査，児童用コンピテンス尺度，自尊感情測定尺度，ソーシャルスキル尺度等の評価により，社会的適応力や自己肯定感について評価，分析，考察する。

2 研究2 家庭・通級指導教室・在籍級の連携を促すツールとしてのチャレンジ日記・発表の検証

(仮説2)①「チャレンジ日記SST」を実践することにより，家庭・通級教室・在籍級の三者の連携を促すのではないかと。②さらに関係機関との連携を促し横の連携が広がるのではないかと。

1) 研究目的 「チャレンジ日記SST」が保護者，在籍級，通級教室との連携を促すツールになるかどうかを検証する。

2) 研究方法 第1節 保護者，担任を対象にアンケート調査を実施し，数値化する。チャレンジ日記を活用している保護者と活用していない保護者の比較を行い，分析する。

第2節 実践事例の検討・分析により検証する。SCAT法を活用する。

3 研究3 関係機関にも広げた「チャレンジ日記SST」の実践と検証

1) 研究目的 対象児童S児が通う児童発達支援事業所でもチャレンジ日記を記入し，S児の社会的適応力や自己肯定感が向上したか，関係機関との連携を促すことができたか検証する。

2) 研究方法 評価尺度評価点の変化により，S児の社会的適応力や自己肯定感が向上したかどうか検討する。また，S児の保護者に半構造化インタビューを行い，SCAT法により分析する。Ⅲ 研究結果

1 研究1 本通級教室に通級する発達障害児4～5名を対象として「チャレンジ日記SST」を実践した結果，指導実践1では，対象児の社会生活適応スキルが向上し，積極的にコミュニケーションをとるようになった。指導実践2では，対象児の児童用コンピテンス尺度の社会と合計得点が高くなり，友達と適切に関わるようになったり，あきらめずに最後まで取り組むようになった。指導実践3では，自尊感情測定尺度の評価の結果，自己評価他者評価ともに，対象児の自尊感情は高くなった。「チャレンジ日記SST」を実践したことにより，発達障害児の社会的適応力と自己肯定感が向上したことが明らかとなった。

2 研究2 アンケートより，チャレンジ日記を活用している保護者の方が活用していない保護者より，在籍級，通級教室，家庭と連携できていると感じている，チャレンジ日記を活用している保護者のうちの8割がチャレンジ日記は三者の連携ツールになっていると回答していることが分かった。「チャレンジ日記SST」は，三者をつなぐ連携ツールとなっていることが明らかとなった。

3 研究3 児童発達支援事業所を含めた四者でチャレンジ日記を記入するようになり，S児の社会的適応力や自己肯定感が向上した。保護者のインタビューの分析結果より，児童発達支援事業所でもチャレンジ日記を記入するようになってから，S児が自己コントロールできるようになり，自主的に行動することが増えた。四者でやりとりする効果があり，チャレンジ日記が連携を促すツールとなった。関係機関にも連携の輪が広がったことが明らかとなった。

IV 全体的考察

1 「チャレンジ日記SST」は自立活動の一つの指導パッケージの試案として提案できる。

1) 「チャレンジ日記SST」は，障害による学習や生活上の困難を改善・克服できるプログラムである。自立活動の内容と「チャレンジ日記SST」は深くつながっている。

2) 「チャレンジ日記SST」は発達障害の特性に応じた支援ができる。チャレンジ日記の特徴やシステムが発達障害児にとって分かりやすく，意欲付けしやすく，有効だった。

3) チャレンジ日記は，様々な機能をもち，一人一人のニーズに対応して支援することができる。

4) 意欲向上→積極的コミュニケーション・行動を形成→自己肯定感向上の好循環を形成した。

通級指導教室では、自立活動の指導を効果的に行っていくことが求められる。1)～4)より、「チャレンジ日記SST」は、新学習指導要領の自立活動が重きを置いているねらいを達成できる。

2 「チャレンジ日記SST」は縦横の連携を図る連携モデルだと考える。

1) 「チャレンジ日記SST」は、家庭・通級指導教室・在籍級・関係機関との横の連携と親子等の連携を強化することが明らかとなった。

2) 通級指導教室が「チャレンジ日記SST」の核となり、連携をする上での中心や調整役となる。通級担当者は学級のコンサルテーション役や校内のコーディネーター役を担う。

3 「チャレンジ日記SST」は発達障害児や発達障害児支援が抱える課題を解決する一つの方略と言える。チャレンジ発表の場を増やしたり、関係機関にも広めていきたい。

4 「チャレンジ日記SST」を実践するには、日記を毎日もしくは毎週記入するという保護者や在籍級担任の努力が求められる。「チャレンジ日記SST」について、保護者や担任が理解し、継続して取り組んでいくよう促し励ましていくことが大切である。

<主な引用文献>

- ・榎本博明(2010)：子どもの『自己肯定感』のもつ意味－自己肯定感の基盤の揺らぎを乗り越えるために－. 児童心理. No.910, 257-266.
- ・星山麻木(2012)：障害児保育ワークブック, 萌文書林, 106-109.
- ・武藏博文(2010)：自立を高める支援ツールの活用, 梅永雄二・井上雅彦(編), 自閉症支援の最前線, エンパワメント研究所, 32-51.
- ・大村知佐子・武藏博文(2004)：知的障害児の自立的な生活を目指した支援システムに関する一考察, 富山大学教育実践総合センター紀要, 5, 7-16.
- ・高島佳江・武藏博文(2013)：広汎性発達障害児の積極的コミュニケーションを図る支援－通級指導教室でのソーシャルスキルトレーニングとチャレンジ日記・発表を通して－, LD研究, 22, 3, 254-266